

ナウマンゾウのいたところ

かつて、日本にはナウマンゾウという、現世のアジアゾウよりも少し小型のゾウが生息していました。日本を代表する氷河時代のゾウで、アジア大陸から渡ってきて、北海道から九州まで分布していました。およそ40万年前から生息し、2万6千年前ころには絶滅しました。ナウマンゾウの名前の由来は、日本でゾウの化石を初めて研究したエドムント・ナウマン(ドイツの地質学者)です。

土浦市を流れる花室川では、その河床に露出する約3万年前の古い地層から、ナウマンゾウの化石が見つかっています。花室川は筑波大学付近を源流とする、流路延長約10・6km、流域面積38・8km²の小さな河川で、霞ヶ浦に注いでいます。

下の写真は、花室川河口で採集された上あごの奥歯(臼歯)です。また、冲宿町にかつて存在した湖水浴場では牙の化石も見つかっています。ゾウにはあごの上下左右に1本ずつ、計4本の大きな歯が生えていて、堅い植物をすりつぶして食べることができました。

では、ナウマンゾウがいたころはどのような時代だったのでしょうか?日本列島において、人類の活動が認められるのは、約4万年前以降です。時代区分では、およそ4万1万6千年前までを旧石器時代といいます。

このころは現在よりも寒い氷期で、ナウマンゾウやマンモス、オオツノジカ、ヘラジカ、バイソンなどの大型動物が生息していました。旧石器時代の人々はこうした動物たちを狩猟の対象とし、季節によって移動する遊動生活を送っていました。

また旧石器時代の気候は冷涼で、トウヒ属やカラマツ属などの亜寒帯性・冷温帯性の針葉樹林が広がっていました。花室川における花粉・木材化石の分析からは、約3万年前はカバノキ属などの冷温帯性落葉広葉樹と、トウヒ属・マツ属単維管束亜属などの亜寒帯性針葉樹の混交林となっていたことがわかっています。

土浦市域において、旧石器時代の遺跡は50か所ほどあります。山川古墳群(常名)では、台形様石器・楔形石器を含む石器ブロックが炉跡と共に見つかっています。放射性炭素年代測定によれば、炉跡の炭化物の年代は約3万6千年前ということがわかっており、それはちょうどナウマンゾウがいたころです。土浦に住み始めた人々はナウマンゾウを求め、花室川周辺を闊歩していたのかもしれない。

花室川河口で採集されたナウマンゾウの臼歯と冲宿町の湖水浴場で採集された牙の化石

は、当館の筑波山地域ジオパークのホール展示でご覧になれます。筑波山地域ジオパーク内には、長い年月をかけてつくられた地形や地質があり、そこには人々の活動の歴史も刻まれています。ジオパークというレンズから私たちの地域を見てみませんか。

☎ 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
(0826・7111)



花室川河口で採集された
ナウマンゾウの臼歯